児島先生の思い出

東　　辰之介
（フランス語）

児島先生は私にとって一つ上の先輩である。私が本学のフランス語教員となったのは平成20年4月のことであったが、児島先生はその前年度に中国語教員として着任なさっていた。専門とする言語は違っていたが、同じ外国語第二部門というチームのメンバーであり、一緒にやるべき仕事は多々あった。部門会議や各種委員会での議論、教職員組合における活動などがその例である。同僚ではあったが、大学など教育機関のよくある慣習にしたがって「児島先生」と呼んでいたので、ここでもそうしたいと思う。

会議における児島先生の発言は、いつでも議論の核心をついており、先生の発言によって議論が進んだりまとまったりすることがよくあった。抑制の効いた、必要にして十分な長さの先生の発言は、私にとって一つのお手本であったし、その背後にある児島先生の高い知性と真面目な仕事ぶりには常々感銘を受けていた。おそらく会議の参加者は皆そう感じていたのではないだろうか。

児島先生の話のうまさを最も感じたのは、本学で祝祷音楽法要とともに毎月開催されている文化講演会の壇上で、平成21年6月15日に先生が講演なさった時のことである。「中国―煙草の文学と鼻煙壺の世界―」というタイトルのもと、中国文学に現われる煙草の多様なイメージを例をあげて短時間で解説した後、鼻煙壺（びえんこ）と呼ばれる小型の嗅煙草入れの芸術性と、その現代コレクション事情について説明してくださった。自分の興味と愛着の対象について過不足なく語り、聴衆にその楽しみの一端を伝えるというのは決してたやすいことではないのだが、先生のお話には誰もが魅了されているように思われた。先生の優しいお人柄と、専門領域における知識の深さがひしひしと伝わってくる、本当に素晴らしい講演会であった。

とはいえ、児島先生のお人柄をただ優しいといって済ますことはできない。月に一度くらいであろうか、会議の後などにみんなで一緒にお酒を飲む機会があったのだが、そうした時には、研究者および大学教員という職責の重さについてしばしば熱く語っておられた。先生の研究業績の長いリストは、そのような高い職業倫理の上に築かれたものである。また、学生にとって児島先生は、普段は優しいけれども叱るべき時は叱ってくれる、頼りがいのある先生だったのではないだろうか。少なくとも、先生が平成 21 年に上海華東師範大学・夏期中国語セミナーの引率をお引き受けになり、帰国した先生から土産話をうかがった時、私はそのような印象を受けた。

私が児島先生とご一緒に仕事をすることができたのは、二年と少しである。年齢も近く、同じ部門の同僚だったわけだから、二人きりで長く話し込んだりすることが一度くらいあってもおかしくはないのだが、残念ながらそのようなことをした記憶はない。私の元来の性格のせいかもしれないが、お互い仕事で忙しかったし、いつでも機会はあると思っていたので、先のばしにしていたのかもしれない。

だから、児島先生と二人きりで話したのは、大学からの帰り道で一緒になったときくらいである。長い時は大学から児島先生が乗り換えのため下車する渋谷駅まで、短い時は駒沢大学駅のホームで偶然お会いしてやはり渋谷駅までだから、いずれにせよ 30 分を超えることはなかった。回数にしても、二年間で十回を超えていないかもしれない。話題もごく一般的なもので、生まれや今住んでいる場所のこと、家族のこと、大学のこと、外国語教育のこと、文学研究のこと、あるいは寄席などについて話した。そして、私が児島先生に教えられることのほうが圧倒的に多かった。

こんな児島先生とのささやかなおしゃべりも、6 月初め頃に交わしたのが最後となってしまった。その時の話は少しだけ覚えている。フランス語の教科書をいま共同執筆しているんですと言ったら、いいじゃないですかと励ましてくれたのである。先生は研究と教育において妥協を許さない人であった。そんな先生から褒めてもらったような気がした私は、なんだか嬉しい気持ちで帰途についた。そう考えると、私も児島先生の生徒の一人だったのかもしれない。